42

温経湯の命名と原義に関する考察

莊　　明仁[1)]，平崎　能郎[2)]

[1)] 台湾　瑞聯中医診所，[2)] 千葉大学大学院 医学研究院和漢診療学

温経湯は金匱要略の婦人雑病脈証并治が出典で，「問曰 婦人年五十所 病下利 數十日不止 暮即發熱 少腹裏急 腹滿 手掌煩熱 脣口乾燥 何也 師曰 此病屬帶下何以故 曾經半産 瘀血在少腹不去 何以知之 其證脣口乾燥 故知之 當以温經湯主之」と記載されている．温経湯の方名の由来に関しては，歴代の医家は，温経散寒の意味で，つまり温を加熱とした解釈をしている．しかし，温経湯には呉茱萸・当帰・川芎・芍薬・人参・桂枝・阿膠・牡丹皮・生姜・甘草・半夏・麦門冬の十二味の薬物があるが，熱薬の配合は少ない．劉渡舟は温経湯の病機および薬物の構成から分析して，「温」は「熱」と解釈してはならず，「和」とすべきであると指摘し，以前の解釈と異なった考えを示した．

筆者は先人の研究を基に，考証学的な研究方法により温経湯の方名の原意を論述したいと思う．藤堂明保，『新漢和大字典』には「昷はふたをうつぶせて皿の中に物を入れたさまを描いた象形文字．熱が発散せぬよう，中に熱気をこもらせること．温は水気が中にこまってむっとあたたかいこと」また，白川静『字通』によると「温」は，1）あたたかい 2）人の心意に移して，おだやか 3）よく温熱する，ならう，たずねる 4）蘊，醞に通じ，つつむ，の 4 通りの解釈がある．温の本来の意味は皿の中の物に蓋をかぶせることで，熱の発散を防ぐことである．従って字義から言って「温」は保存の意味を持ち，加熱の意味ではない．温経湯の条文をよく見ると病症は“下利（下血）数十日止まず”からはじまっている．これは乃ち離経の血である．血道から血が漏れ続けるのを防ぐ為に温経湯で治療するとしている．言い換えると，温経湯に血道を被い塞ぐ作用があり結果的に止血の目的を果たす．つまり，温経とは「経水を保存する」の意味である．

また温は蘊の仮借字でもある．古人はしばしば仮借字を用いたが，温の仮借的用法も様々な典籍に見られる．例えば，『詩』小雅・小宛における「飲酒溫克」に関して，孔穎達疏には「蘊藉者，定本及箋，温字に作る」と書かれてある．舒瑗も温の解釈について「苞裹，曰く蘊，蘊藉自持の謂ひ，含容の義なり．經中温に作るは，蓋し古字は通用す」と述べている．温経湯の温を蘊（つつむ）の仮借字と考えれば上記の意味と相通じる．

「温」を保存や封蔵とする考え方は内経にも見られる．例えば生気通天論の「冬不藏精，春必病溫」，冬に精気を螫藏しなかった為に，春になって温病疾患を発症する．陰陽応象大論に「冬傷於寒，春必病溫」とあり，これもまた同様である．成無己は「冬時寒を感じ，経中に伏蔵し，即発せざるものは，之を伏気と謂う」と述べている．伏気はその場ではなくその気を蓄えて起きる場合を指す．つまり体内に蘊積した邪気がすぐには発病せず，後に時を経て発病し温病となるのである．これ故に伏気病温の説がある．

熱病に関しては，熱論に記載されているように「今夫熱病者，皆傷寒之類也」，また『傷寒論』傷寒例には「凡そ寒に傷られ，伝経すれば則ち熱を病むを為す，熱甚だしきと雖も死せず」．これは伝経化熱の由来となっている．内経，傷寒論中には温と熱は，一方は伏気病温，一方は伝経化熱で，全く違った概念として記載されている．温病と熱病は一見似ているが由来は異なっている．古人は温と熱の字の使い方を明らかに区別していた．

温経湯の「温」は「熱」と解釈してはならなり，筆者の私見では『字通』の四番目の解説の「温は蘊」の解釈が原義に則っていると思われた．